近世期の信達地方阿武隈川沿いに設けられた郷蔵関連施設の空間構成に関する研究

SPATIAL STRUCTURES OF FACILITIES CONCERNING GOGURA THAT LOCATED ALONG THE ABUKUMA RIVER IN THE SHINTATSU REGION IN THE EDO PERIOD

相模 誓雄^{*1}

Chikao SAGAMI

This study draws attention to facilities concerning the gogura that were located along the Abukuma River in the Shintatsu region for the shipping of jomai to Edo. It aims to clarify the fact of their spatial structures based on valuable illustrations, mura-meisai-tyo (details of a village), and other historical sources. Yose-gura and tome-ya in the Shintatsu region during the Mid-Edo period were at the heart of a system where villages worked together to transport jomai, a practice that continued in the gogura-syo during the last days of the Tokugawa Shogunate.

Keywords : Storehouse, Premises, Spatial structure

蔵, 屋敷, 空間構成

1. はじめに

阿武隈川流域の旧信夫郡と旧伊達郡（「信達地方」と呼ばれる）（Fig. 1）は、幕藩体制成立時、米沢藩領であったが、寛文4年（1664）に幕府領になった^{注1）}。寛文10年（1670）、幕府は、江戸の商人の河村瑞賢に信夫郡の年貢米（「城米」と呼ばれる）を江戸へ廻漕するように命じ^{注2）}、翌年に東廻航路が開かれた^{注3）}。阿武隈川沿いには河岸が設けられ、その数は、宝暦8年（1758）において福島城下、桑折村、東大枝村など14ヶ所に及んだ^{注4）}。幕府領における城米輸送には、農民が深く関わっていた。村々には、村の責任者が領主に代わって徴収する年貢米を納める郷蔵が存在した^{注5）}。通常郷蔵は村毎に設けられるが、当地では、複数の村が「蔵組」をつくり、各村の郷蔵を1ヶ所にまとめて設けた。「寄蔵」と呼ばれる。寄蔵に収められた米は、城米として近くの河岸へ運ばれて船で積み出される（「津出し」と呼ばれる）。寄蔵を河岸の周辺に設けられない村々は、河岸に城米を留め置くため「留屋」を設けた。留屋は、寄蔵から幕府の御蔵への米の輸送を中継する施設と言える。同じ河岸を利用する村々は、「河岸組」を編成し、共同して津出しや廻漕に関わる業務を行った。このような留屋もその規模から蔵所の観を呈していたと予想される。天明期（1781-1788）頃になると、村毎に城米を直接河岸へ運んで津出するようになったと史料に記されている^{注6）}。藩政後期の信達地方に関する史料には、寄蔵や留屋といった呼称は見られなくなる。阿武隈川沿いには、「郷蔵」、「御城米御蔵」や「川岸御蔵」と呼ばれる蔵所が存在したが（Table1）、その役割は、藩政中期の寄蔵や留屋と変わらなかった。

寄蔵や留屋の建築遺構は後述する1棟のみであり、蔵所の実態が知られる図面も少ない。本研究は、寄蔵や留屋など信達地方の阿武

Fig.1 The Shintatsu Region on the Abukuma River Basin

隈川沿いにおける郷蔵関連施設に焦点を当て、貴重な絵図や村明細帳といった史料から、それらの空間構成の実態を明らかにすることを目的とする。

2. 既往研究・手順

信達地方の阿武隈川沿いにおける郷蔵関連施設に関する既往研究には、組織から施設までを包括的に述べた安田初雄⁹⁾や竹川重男^{注7)}による史学の研究が見られる。郷蔵建築に関しては、富山博が全国各地の建築遺構を調査している。その一環で阿武隈山地の郷蔵を報告しているが¹¹⁾、信達地方は含まれてない。筆者は、幕府や諸藩が年貢米の徴収及び廻米のために設けた御蔵所の空間構成について検討してきた¹²⁾⁻¹⁷⁾。郷蔵についても、越後国における郷蔵所の空間構成について検討した¹⁸⁾。安田や竹川の研究と同じく、本研究も信達地方における郷蔵関連施設に焦点を当てるが、それらの空間構成

^{*1} 仙台高等専門学校総合工学科 教授・博士（工学）

Prof., Dept. of General Engineering, National Institute of Technology, Sendai College, Dr.Eng.

を検討しようとするものである。

藩政期の当地における河岸の周辺には、郷蔵関連施設があったが、史料から存在が知られるものは、信夫郡の渡利村（天神河岸と渡利河岸の2ヶ所）、福島城下、瀬上村、伊達郡の伏黒村、桑折村、中瀬村、徳江村、東大枝村、梁川村の10ヶ所である（Table1）。なお、上郡河岸の蔵所は、幕府の御蔵所であり、出羽国置賜郡の城米の津出しに用いられたので^{注8)}、本稿では取り上げない。上記のうち、桑折村の寄蔵や幕末期の東大枝村の郷蔵所は、蔵が村毎に建てられた。一方、河岸組が設けた留屋の様子は上記とは異なった。

以上のことから本稿は、はじめに、各施設の成り立ちや建物概要を示す。次に、河岸の施設と郷蔵に分けてそれぞれの共通性及び空間構成手法を明らかにする。終わりに、信達地方阿武隈川沿いにおける郷蔵関連施設の空間構成の意義についての考察を試みることにする。

3. 成り立ち・建物概要

3.1 信夫郡

3.1.1 渡利村

渡利村においては、天神河岸と渡利河岸に郷蔵関連施設があった。

天神河岸には、小手郷4ヶ村の留屋があった。元禄・宝永期（1688-1710）頃の「小手郷村々書上帳」の立子山村の項^{注9)}に、「天神川岸一、長式十式間半はり 内訳 一、六間立子山村 一、六間飯野村 一、五間大窪村 一、五間青木」とある（Fig. 3, 2-5）。内訳に記される各村の長さを合計すると22間になるので、梁行2.5間の一棟を4ヶ村で分けて共有していた可能性がある。一方、文化11年（1814）の「立子山村明細書上帳」^{注10)}に、「一天神川岸御蔵桁六間横三間壱ヶ所 右御蔵年々御廻米川下ヶ仕候ニ付 右川岸江御上米運送御改を請申候上 川下ヶ之間納置候御蔵ニ御座候」とあり、藩政後期になると立子山村が単独で「川岸御蔵」を設けている。前記史料の留屋の立子山村部分と比較すると、梁行が異なるが、桁行は同じであり、用途は留屋とほぼ同じであった。

渡利河岸には、小手郷14ヶ村の留屋や、渡利村と大笹生村の寄蔵があった。元禄16年（1703）の「信夫郡渡利村差出シ帳」^{注11)}に、「一同（小手寄蔵）長六十六間 横式間半 高八尺五寸 右同断（萱ふき）下 屋敷三反三畝十八歩除地 土蔵（中略）一寄御蔵 長八間 横三間、高九尺 渡利村大笹生村」とある。また、前掲元禄・宝永期（1688-1710）頃の「小手郷村々書上帳」の秋山村の項^{注12)}に、「一、長五拾六間 横拾八間 屋敷 三反三畝拾八歩 渡利村川岸一、留屋 長六拾貳間 式間半ばり（後略）」とあり、前者の長さ66間の小手寄蔵は、後者の長さ62間の留屋に対応すると見られる。呼称の違いは、施設が立地する村から見ると寄蔵であり、それ以外の河岸組の村々から見れば留屋といった視点の違いによるものと推察される^{注13)}。なお、このことは、後述する瀬上村でも同じである。本稿では、河岸組の村々（Fig. 3, 6-18）の留屋として検討を進める。後者の史料に小手郷の14ヶ村と「納米入」にそれぞれの長さが併記されている。長さを合計すると62間になる。長さは桁行と見ることができ、敷地長さ56間、横18間の屋敷地に、桁行62間の直屋は収まらない。このことは後で検討する。収納空間は、最小規模の村で5坪、最大規模の村で15坪となり、7.5坪の村が最も多い。渡利村と大笹生村の寄蔵も、後者から見れば留屋であろう。村毎

Table1 A list of facilities concerning Gogura on the Abukuma River in the Edo period

County	Village	Riverport	Early Edo period, mid-Edo Period		Late Edo period
			Yose-gura	Tome-ya	Others
Shinobu	Watari	Tenjin		○	Kawagishi-okura
	Watari		○	○	
		Fukushima	○		
	Motouchi				
Date	Senoue			○	
	Oka				
	Fushiguro		*1	○	
	Kori		○		Gogura*2
	Kamigori		*3		
	Nakaze			○	
	Danzaki				
	Tokue		○		
	Higashioeda		○		Gogura, Kashi-okura*4
	Yanagawa		○	○	Kawagishi-okura

Note)*1: A relic of Yose-gura in Fushiguro District Date City
*2: 文久元年（1861）「小坂村明細帳」（文獻23），pp. 339-341 所収
*3: Okura-syo owned by Yonezawa Domain
*4: 文久元年（1861）「西大窪村指出明細帳」（文獻23），pp. 331-336 所収

Fig.2 A painting of Watari Village in the year 1836

Fig.3 Location of the river port and the villages

に分けた場合、平均坪数は12坪であり、上記の平均的な7.5坪より広い。大笹生村は、渡利村から見て対岸、阿武隈川と平野部で隔たれた山村であり(Fig. 3)、渡利村と蔵組をなした経緯は不明である。

これらの施設を天保7年(1836)の「渡利村絵図」(Fig. 2)において見ると、天神河岸、渡利河岸それぞれに妻側を川へ向けた蔵が2棟描かれている。同年の別の村絵図^{注14)}には前者に「御蔵」(前述の川岸御蔵)、後者に「御米蔵」と記されている。他に郷蔵が描かれる絵図は見られない。

3.1.2 福島城下

福島河岸には、米沢藩の御蔵所や福島城主の蔵屋敷があった。享保20年(1735)の「福島城下惣町絵図」^{注15)}には、宝林寺から下流へ向かって、「大工棟梁治郎兵衛」、「寄御蔵」(2ヶ所)、「畑」、「米沢米積場」と記される屋敷地などが描かれている。明和期(1764-1771)の「阿武隈川舟運図」や文政期(1818-1829)の「阿武隈川水路図」^{注16)}には、宝林寺から下流へ向かって、「上杉弾正大弼蔵」、「上総屋船会所」、「御城米御蔵」、「板倉甲斐守(福島城主)蔵」と記される屋敷地が描かれている。享保20年(1735)の「福島城下惣町絵図」に「寄御蔵」と記される敷地と「阿武隈川水路図」に「御城米御蔵」と記される敷地は、同一とは見られない。なお、これらの図に建物は描かれていない。他に蔵所が描かれる絵図は見られない。

3.1.3 瀬上村

享保17年(1732)の「瀬上村絵図」^{注17)}には、阿武隈川左岸、川岸からやや離れた土地に、柵で囲まれた3棟の建物が描かれており、「寄御蔵」と記されている。一方、寛保3年(1743)の「上飯坂村明細帳」^{注18)}には、17ヶ村による河岸組の留屋と記されている。呼称の違いについては前述した。

河岸組の村は、後述の瀬上村をはじめ鎌田村など阿武隈川左岸の村々であった(Fig. 3, 19-24)。延享3年(1746)の「瀬上村明細帳」^{注19)}には、「一郷蔵敷 壹ヶ所 是者前々より之蔵組 御料宮代村入江野村井野目村鎌田村本内村瀬上村 川又御料高梨村沖中野村平田村飯塚村佐場ノ北矢ノ目村南矢ノ目村丸子村 松平越中守様御料知上飯坂村井下飯坂村 〆拾六ヶ村ニ而相納申候 雨屋破損之節へ御材木被下置御普請被仰付候」とある。この「雨屋」は、雨露をしのぐ程度の簡易な構造の小屋や、土蔵を雨から守る覆屋などが考えられる。筆者は、福島市において過去に土蔵の覆屋を見たことがないので^{注20)}、小屋の可能性が高い。また、前掲の「瀬上村明細帳」から、この留屋には、「御料(幕府直轄)」、「川又御料(川俣代官所支配)」、「松平越中守様御料知(桑折藩・譜代大名)」といった所轄や領主の異なる村々の米が保管されていたことが知られる。従って、享保17年(1732)の「瀬上村絵図」に描かれる3棟の蔵は、所轄・領主別に設けられた留屋と考えられる。

しかし、宝暦7年(1757)頃に本内(鎌田)河岸が開設されると、瀬上河岸組から5ヶ村が抜け、安永4年(1775)にはさらに8ヶ村が抜けており^{注21)}、留屋は消滅したと推察される。

3.2 伊達郡

3.2.1 伏黒村

伏黒河岸は、阿武隈川右岸にあった。寛保2年(1742)に白河藩領になった上保原村の場合、幕府領時代から伏黒村の河原に留屋を設けていた。寛保2年(1742)の「上保原村鑑指上帳」^{注22)}に、「一御年貢米津出 是者岡御料伏黒村川原之内留屋作り置、右留屋へ持

Fig.4 Old mud-walled storehouse in Fushiguro District Date City which was one of Gogura in Yose-gura

Fig.5 Yose-gura in the Kori Village from a drawing of Kori Town around the mid-Edo period

参仕御改申請上納仕来り申候」とある。当地は、領地替えが行われた地域であり、河岸組の村々は明らかでない。なお、私領(藩)へ転入後もこの河岸を用いていた村が知られる^{注23)}。

現在の伊達市伏黒字川岸地区には、藩政期の寄蔵と伝えられる1棟の土蔵(伊達市指定有形文化財「伏黒河岸寄蔵」)が残されているが^{注24)}(Fig. 4)、この遺構は屋敷地にあり、河原の内ではない。規模は、桁行5間、梁行2間半であり、1ヶ村分の大きさである。この郷蔵の位置や建物が描かれる絵図史料は見られない。

3.2.2 桑折村

郷蔵は、奥州道中の桑折宿とともに台地上に設けられたので、河岸まで6町余の距離があった。この蔵地は、米沢藩領時代、藩の御蔵所であった^{注25)}。寛文4年(1664)、幕府領になり、寄蔵になったと推測される。元禄6年(1693)に米沢藩時代以来の御蔵守の居宅が建てられている^{注26)}。当地は、元禄13年(1700)から延享4年(1747)まで桑折藩(譜代大名)領となる。桑折藩領時代の作と思われる「奥州桑折之図」(Fig. 5)の蔵地に「寄蔵」と記されており、寄蔵は継承されていた^{注27)}。寄蔵に描かれる9棟の建物のうち、河岸側の比較的小規模な2棟は御蔵守関係、町場側の7棟は郷蔵と見られる^{注28)}。幕府領時代の明和9年(1772)の「桑折村明細帳」^{注29)}に、「一、郷蔵 此町歩壹町廿四歩 壹ヶ所 但御置米郷蔵壹ヶ所村々郷蔵九ヶ所」とあり、蔵組は南半田村^{注30)}など9ヶ村であった(Fig. 3, 28-30)。以上のことからFig. 5の寄蔵の蔵々の多くは、村毎に建てられていたと考えられる。蔵々は、町場側と河岸側に開か

れた門を結ぶ庭の両側に、妻側を向けて建ち並んでいる^{注31)}。村毎の米の搬入・搬出に配慮された建物配置と言えよう。

寛政4年(1792)、置粕御蔵が設けられた^{注32)}。寛政末・享和始(1800-1801)の蔵組は10ヶ村であり^{注33)}、藩政後期においても寄蔵の形式は存続したと推測される。なお、桑折河岸における留屋の存在は知られない。

3.2.3 中瀬村

中瀬河岸にも小手郷村々の留屋があった。元禄・宝永期(1688-1710)頃の「小手郷村々書上帳」の御代田村の項^{注34)}に、「中瀬村中瀬留屋へ通法四里程 一、留屋式拾六間三間はり 内訳一、三間御代田 一、三間下ぬかた 一、五間上糠田 一、三間下小国 一、四間布川 一、三間下手戸 一、五間小嶋 一、(ママ)」とある(Fig. 3, 35-41)。また、寛保2年(1742)の「町市柳村鑑指上帳」^{注35)}にも、「一御年貢津出 是ハ梁川御料中瀬河岸之内留屋作置、御改申請上納仕来り」とあり、白河藩領になった町市柳村もまた、幕府領時代からこの留屋を利用していたと推測される。明治2年(1869)写しの「懸田村明細書上帳写」^{注36)}には、「一御年貢津留 是ハ瀬の上領中瀬村へ小屋建置、村方にて御年貢米斗立同所へ持運び御改を受、其より阿武隈川江河脊出仕、(後略)」とあり、小屋であった。中瀬留屋が描かれた絵図史料は見られない。

3.2.4 徳江村

元禄13年(1700)の「森山村差出帳」^{注37)}に、「一郷蔵之儀当村ニハ無御座候、只今迄ハ徳江村之寄蔵江入置尤番人付置申候。」とあり、当時、徳江村に寄蔵があった(Fig. 3, 43, 44)。その実態は明らかでない。なお、元禄13年(1700)から延享4年(1747年)まで、森山村は桑折藩領であった。

3.2.5 東大枝村

東大枝村^{注38)}(現在の伊達市梁川町東大枝, Fig. 3, 45)の郷蔵所は、後述するように、伊達郡における城米輸送の重要な拠点の1つであった。貞享5年(1688)の「東大枝村寄御蔵場書上申事」^{注39)}から寄蔵の存在が知られる。天明9年(1789)の「伊達郡東大枝村明細差出し帳」^{注40)}に、「一当村郷蔵之儀寄蔵江西大枝貝田東大窪西大窪只今ニ而ハ五十沢光明寺六ヶ村ニ而御城米納申候、尤番人扶持米之儀者右蔵組ニ而老人扶持相出申候、」とあり、東大枝村と6ヶ村による蔵組の寄蔵であった。文化9年(1812)の「五十沢・東大枝村境絵図」^{注41)}や天保8年(1837)の「奥州伊達郡東大枝村絵図」(Fig. 6)を見ると、阿武隈川左岸の段丘上に「郷蔵」と記される蔵所が描かれている。蔵は、前者に3棟、後者に5棟描かれている。時代が下るにつれて蔵の数が増えている。しかし、これらの図は、その目的から蔵の数を正確に描いたものとは言い難い。河岸とは、「御出道」で直接結ばれており、その距離は6町であった。この郷蔵所は、明治維新後も存続していたが、明治9年(1876)に蔵が解体され^{注42)}、明治22年(1889)に土地が払い下げられた^{注43)}。

明治9年(1876)の郷蔵所の見取図(Fig. 7)があるので、蔵々について詳しく見たい。本図から幕末期の郷蔵所を見て大過ないだろう。まず、本図には、「東大枝御蔵」と記される御蔵が1棟描かれている。前掲の天明9年(1789)の「伊達郡東大枝村明細差出し帳」に、「一御置粕之儀者東大枝村貝田東大窪石母田山崎泉田藤田伊達崎徳江右拾ヶ村御年貢御置粕納申候、(後略)」とある。御蔵とあることから、この蔵は領主(幕府)の蔵であり、東大枝村の年貢米とそ

Fig. 6 Vicinity of Gogura-syo in the Higashi-oeda Village from a painting of the Higashi-oeda Village in the year 1837

Fig. 7 A building arrangement of Gogura-syo in the Higashi-oeda Village in the last days of the Tokugawa Shogunate

の周辺の村々の囲柵を納めるため、藩政中期以降に設置されたと推察される^{注44)}。村数は12であり、蔵組以外の村が含まれている。次に、蔵組の村名が記される建物が7棟描かれている。これらは村毎に建てられた郷蔵と見られる^{注45)}。但し、東大窪村の蔵は、2棟である。本村は、天保8年(1837)に「新料」、「古料」や「上知」に分割されていた^{注46)}。明治4年(1871)に上知が併合されているので^{注47)}、一方は新料、もう一方は古料の蔵と考えられる。天保8年(1837)の「奥州伊達郡東大枝村絵図」の郷蔵所の周囲は、柵で囲まれ、北端と南端に門が開かれている。明治9年(1876)の「地積改正野取図面」(Fig. 7)において門の位置を検討する。Fig. 6において北門は、敷地北辺の中央よりやや東寄りに描かれている。しかし、本図は郷蔵所を正確に描いたものとは言い難い。Fig. 7では貝田村の蔵の東西両側の空地が、西大窪村の蔵と光明寺村の蔵との間の空地よりやや広くなっており、北門は、aもしくは、bの位置に、南門は、「五十沢村」と記される建物の東側の空地に面した場所cに

開かれていたと推測される。このように東大枝村の郷蔵所においても、桑折村の寄蔵のように河岸側とその反対側に門が開かれるが、郷蔵の配置は規則的でなかった。

以上、幕末期の郷蔵所は、蔵が村毎に棟を分けて設けられていたが、時代的変遷については今後の検討を要する。

3.2.6 梁川村

梁川村には、梁川村など下郷と呼ばれる村々の年貢米を納める寄蔵があった (Fig. 3, 46)。享保 16 年 (1731) の「梁川村指出書上帳」^{注 48)}によると、その敷地は、長さ 33 間半、横 19 間半であった。その場所は明らかでないが、阿武隈川の河岸から 7 町離れていた^{注 49)}。なお、作製年不明の「梁川古城図」^{注 50)}を見ると、梁川町の北側を阿武隈川へ向かって流れる塩野川沿いに、「米蔵」と記されており、寄蔵の可能性が高い。寄蔵は河岸から離れていたため、河岸に「留小屋」を設けて船で積み出される城米の留め置き場とした。前掲の享保 16 年 (1731) の「梁川村指出書上帳」に、「(前略) 御年貢米津出之節御米入置申留小屋修復等入用之竹木ハ御立林ニ而被下葉縄人足ハ下郷村々ニ而御米高ニ割合年々相勤申候、(後略)」とある。寄蔵や留小屋の実態が知られる史料は見られない。

4. 考察

4.1 河岸の施設

4.1.1 共通性

藩政中期の阿武隈川右岸における渡利村の天神河岸と渡利河岸、中瀬村の留屋の実態が知られた。これらに共通する点は、第一に、村々の梁行が同じであること、第二に、桁行は村によって異なることである。その長さは、最短が 2 間、最長が 6 間である。

4.1.2 空間構成手法

まず、渡利河岸の留屋を、同じ時代に河岸組 14ヶ村のうち 11ヶ村が秋山村に設けた寄蔵と比較する。元禄・宝永期 (1688-1710) 頃の「小手郷村々書上帳」の秋山村の項^{注 51)}に、「一、寄御蔵四ヶ所 (中略) 三間二廿一間壱ヶ所 三間十式間壱ヶ所 三間十一間壱ヶ所 三間七間壱ヶ所 是ハ只今無御座候」とあり、寄蔵は 4 棟を 11ヶ村が共有していた。桁行の合計は 51 間であり、1ヶ村当たり平均は 4.6 間となる。一方、留屋の 1ヶ村当たり桁行の平均は、前掲注 12) より 3.4 間となり、桁行梁行とも留屋の方が短い。このような小さな留屋を村毎に建てると、両妻側の外壁や軒が余計に必要なので効率が悪い。従って、各村の空間を可能な限りまとめた方がいいだろう。また、留屋の普請用の竹木は幕府から支給されたが、人足やその他の資材は村々が米高の割合で供出しており^{注 52)}、村々は共同して普請に当たる必要があった。

次に、棟数について検討する。前掲の「小手郷村々書上帳」には、渡利河岸の留屋について長さ 62 間とあり、この桁行の直屋では、敷地に収まらないことを前述した。しかし、Fig. 8 のように曲屋とすれば納まる。なお、筆者が過去の研究で取り上げた幕府や諸藩の御米蔵で最長のものは、九州地方における柳川藩の三の丸御蔵所の御米蔵で、桁行 85 間、梁行 3 間であり^{注 53)}、前記の長さは留屋でも実現可能であろう。また、複数棟でも成り立つ。他の河岸組の留屋を一棟とした場合の間取りを Fig. 8 に示す。

所轄毎に棟を分けていたと考えられた阿武隈川左岸の瀬上村の留屋も上記の留屋と同じ空間構成となる。以上のことから留屋は、地

Fig.8 Schematic diagrams that restored the Tome-ya

Fig.9 The fig. above: Villages of a cooperative that concerned the Higashi-oeda Gogura-syo The fig. below: A map of Historic spot in the Higashi-oeda District Date City

Table2 The distance from Higashi-oeda village to each village

Destination	Distance		
	里 Ri	町 Tyo	間 Ken
Fudaba*1 in Isazawa village		21	10
Fudaba in Nishi-Oeda village		16	30
Fudaba in Higashi-okubo Village (古料 koryo*2)		A little more than 20	
Fudaba in Kaida Village	1	7	

Note) *1: Place of roadside prohibition-edict boards *2:Old territory owned by shogunate 宝暦 11 年 (1761) 『御巡見使案内控』(文献 23), pp.344-363 所収) による。*Unit of length: 1 Ri is 36 Tyo, 1 Tyo is 60 Ken, 1 Ken is about 1.8 meters

Table3 The distance from each village to the Gogura-syo

Starting point: each village	Distance		
	里 Ri	町 Tyo	間 Ken
Nishi-oeda		A little more than 24	
Higashi-okubo (新料 shinryo*1)		About 26	
Nishi-okubo	A little more than 1		

Note) *1: New territory owned by shogunate *Unit of length: refer to notes of table 2

域に関係なく、多数の村が一棟を村の米高に応じて区分したものと考えられる。つまり、長屋形式である。

4.2 郷蔵

4.2.1 共通性

藩政中期の2ヶ村蔵組の渡利村、藩政中期以降の9ヶ村もしくは10ヶ村蔵組の桑折村の寄蔵（郷蔵所）や幕末期の8ヶ村蔵組（東大窪村を新古2ヶ村とした場合）の東大枝村の郷蔵所の実態が知られた。桑折村の寄蔵や東大枝村の郷蔵所に共通する点は、第一に、多くの蔵が村毎に棟を分けている点である（以後、「分棟形式」とする）。第二に、敷地囲いの河岸側とその反対側へ向かって門が開かれている点である。相違点は、蔵々の配置である。桑折村の寄蔵に対して東大枝村の郷蔵所の建物配置には規則性がない。Fig. 7の敷地内において4棟の蔵が北門側に、その他の蔵は南門側に寄せて配置されている。1棟の御蔵が西端に配置されている。北門（Fig. 7のaもしくはb）や南門（同c）から見た場合、御蔵は敷地の奥に位置している。

一方、藩政中期の2ヶ村蔵組の渡利河岸の寄蔵は、一棟を村毎に区分けしていたことが考えられる。このような長屋形式の寄蔵は、河岸までの道程が長い場合留屋を設けた同時代の立子山村や御代田村の寄蔵にも見られる^{注54)}。分棟形式と比較した場合これらは、蔵組の村の数が少なく、村々の室の桁行は留屋同等であり^{注55)}、一棟を共有した方が効率よかったと推察される。また、分布域も異なる。

以上、伊達郡の阿武隈川左岸においては、多数の村が1つの敷地に各々蔵を設ける郷蔵所があり、このような建築方式は他の地域の藩政中期の寄蔵や留屋と異なるものである。なお、ここで言う他の地域は、上記した信夫郡の阿武隈川右岸（渡利河岸の寄蔵）や、伊達郡の阿武隈川右岸小手郷（立子山村や御代田村の寄蔵）の地域である。

4.2.2 空間構成手法

本稿では、分棟形式の東大枝村郷蔵所に焦点を当て、その空間構成手法を検討することにした。蔵組の西大窪村に関する文久元年（1861）「西大窪村指出明細帳」^{注56)}に、「一江戸御廻米者、東大枝河岸ニ御蔵建置、毎年初納御触之節、津出し相納申候、」とあり、この郷蔵所は、幕末期においても寄蔵として用いられていたことが知られる。なお、同書に「一御蔵場 土蔵式間半四間 穀入壺間式間 壺ヶ所」とあり、当時西大窪村に「御蔵場」があったが、その主たる用途は不明である。

第一に、貝田村と光明寺村の郷蔵は、北門寄りに位置している。蔵組の村々の位置を比較すると、貝田村は、東大枝村から最も離れており（Table2）、現在、旧貝田村の「町裏」や旧光明寺村の「志久」といった主たる集落は（Fig. 9上）、旧西大窪村や旧東大窪村の主たる集落より標高の高い場所に見られる^{注57)}。藩政期当時、両村の年貢米は、馬などに載せて天保8年（1837）の「奥州伊達郡東大枝村絵図」に描かれる幹線道路（Fig. 6のb）を通り、北門から運び入れられたと考えられる。

第二に、五十沢村の郷蔵は、南門寄りに位置している。五十沢村の村域は、阿武隈川に沿っており、蔵組の中では唯一、本郷蔵所から見て阿武隈川の下流側に位置する（Fig. 9上）。Fig. 6には、東大枝村の町場から郷蔵所の北を通り、五十沢村へ至る幹線道路（同図のb）が描かれている。また、藩政期の作の「伊達郡東根領内絵図」

^{注58)}には、東大枝村の渡船場から五十沢村へ至る道筋が描かれている。後者の道は、明治前期の文献に記される「梁川街道」であり^{注59)}、本郷蔵所付近において御出道に交わるものと考えられる（Fig. 9下）。五十沢村の場合、この道を用いれば、他の村域を通らずに南門から本郷蔵所へ年貢米を運び入れることができた。

第三に、「東大枝御蔵」は、門から見て最も敷地奥、敷地の西端に位置していた。城跡側の比較的安全な高い場所に設けられているものの、年貢米の輸送距離が最も短い村であり、他村に配慮した配置と言えよう。

第四に、東大窪村の郷蔵と、西大窪村の郷蔵は、庭を挟んで離して配置されている。これらの村域は、郷蔵所から見て阿武隈川の上流側に位置する（Fig. 9上）。これらの村の年貢米も、前述の幹線道路（Fig. 6のb）を通して、北門から運び入れられたと考えられる。隣接する2ヶ村は、村から郷蔵所までの距離の差が少なく^{注60)}（Table3）、村名が似ているので、両村の年貢米の運び入れが重なると、混雑や間違いが生じやすい。これを避けるために蔵同士を離したと考えられる^{注61)}。規模の大きい長屋形式の留屋でも、村名が似ている村同士は室を離していた^{注62)}。なお、東大窪村における新料の蔵と古料の蔵は、さらに離して配置されている。このことは、東大枝村と西大枝村にも当てはまるだろう。

以上、東大枝村の郷蔵所の村々の蔵の配置は、地理的条件や納入時の混雑を避けることに配慮されていたと考えられる。

5. まとめ

本研究は、近世期の信達地方阿武隈川沿いに設けられた郷蔵関連施設に関して以下のことを明らかにした。

藩政中期の信達地方には、城米輸送のための留屋と寄蔵があった。留屋は、村の郷蔵から河岸までの距離が長い場合、村々の組合（河岸組）が設けた城米の留め置きを目的とした河岸の施設であった。一方、寄蔵は、川沿いの村などに蔵組が設けた郷蔵所であった。

藩政中期の留屋の共通点は、桁行が村によって異なる比較的小規模な室で構成されていることであり、その空間構成手法は一棟を村々が米高に応じて区分する長屋形式であった。その建築の中には、「雨屋」や小屋と呼ばれる比較的簡易な木造が含まれ^{注63)}、普請には河岸組の村々が共同して当たっていた。一方、寄蔵は、分棟形式と長屋形式があった。前者の実例としてFig. 4の建築遺構が位置付けられる。藩政後期になると、留屋は見られなくなるが、信夫郡の天神河岸に、1ヶ村が設けた川岸御蔵が確認できた。伊達郡の阿武隈川左岸の郷蔵所は、藩政中期の寄蔵を引き継ぐものであり、分棟形式であった^{注64)}。その敷地囲いには門が河岸とその反対側へ向かって開かれていた。このように蔵組の村々の郷蔵を集めることで、村々にとっては蔵守を共有できるメリットがある。また、幕府や蔵組の役人にとっては城米の安定した津出しを図ることができた。東大枝村の郷蔵所の空間構成手法は、村々の地理的条件への配慮と、納入時の混雑の回避に起因するものであった。

以上、藩政中期の信達地方の寄蔵や留屋は、村々が共同して城米輸送を行うための仕組みの主体であり、その意識は幕末期の郷蔵所に伝えられていたと考えられる。

今後も、村々に営まれた郷蔵所の空間構成について研究を進めていきたいと考えている。桑折村の寄蔵における建物配置の要因や東

大枝村の郷藏所の変遷については、新たな史料の発見を待って検討したい。

謝辞

2010 年、福島県国見町の郷土史家菊池利雄氏に河岸跡や寄蔵の建築遺構をご案内いただき、参考文献を頂戴した。絵図史料の利用について、伊達市教育委員会、桑折町教育委員会からご配慮をいただいた。この機会を借りて御礼を申し上げる。

参考文献

- 1) A society to research the history of domain administration: Hanseiseiritsushi-no-sogokenkyu Yonezawahan(General Research about the establishment of the domain administration, Yonezawa Domain), Yoshikawa kobunkan, 1983
藩政史研究会：藩制成立史の総合研究 米沢藩, 吉川弘文館, 1983
- 2) Editorial board of “The Great Dictionary of National History” : Kokushi-daiziten(The Great Dictionary of National History), Vol. 3, Yoshikawa kobunkan, 1994
国史大辞典編集委員会：国史大辞典第 3 巻, 吉川弘文館, 1994
- 3) Watanabe, N. : Kaido-to-suiun(Highway and Water transportation), Iwanami Japan History Course, Vol. 10, Iwanami Shoten, 1975
渡辺信夫：街道と水運, 岩波講座日本歴史 10, 岩波書店, 1975
- 4) Edited by Fukushima Pref. : Fukushimakenshi(History of Fukushima Pref.), first half of Vol. 10, Fukushima Pref. , 1967
福島県編：福島県史第 10 巻上, 福島県, 1967
- 5) Kobayashi, H: Goguraseido-no-hensen(Transit of a tax system which used Gogura), Kobayashi, H, 1934
小林平左衛門：郷藏制度の変遷, 小林平左衛門, 1934
- 6) Edited by editorial board of “History of Hobara Town” : Hobaratyoshi (History of Hobara Town), Vol. 2, Hobara Town, 1983
保原町史編纂委員会編：保原町史第 2 巻, 保原町, 1983
- 7) Edited by editorial board of “History of Kawamata Town” : Kawamatatyoshi (History of Kawamata Town), Vol. 2, Kawamata Town, 1976
川俣町史編纂委員会編：川俣町史第 2 巻, 川俣町, 1976
- 8) Edited by editorial board of “History of Fukushima City” : Fukushimaishishi (History of Fukushima City), Vol. 8, Educational Board of Fukushima City, 1968
福島市史編纂委員会編：福島市史第 8 巻, 福島市教育委員会, 1968
- 9) Yasuda, H. : Gojomaitsudashi-to-abukumagawa-no-syoun(Shipping the Gojomai from the port and Water transportation in the Abukuma River), Journal of the study of History in Fukushima Pref. , Vol. 49, pp. 1-28, 1987. 10 (in Japanese)
安田初雄：御城米津出と阿武隈川の舟運, 福島史学研究, 第 49 号, pp. 1-28, 1987. 10
- 10) Takekawa, S: Abukumagawa-no-syoun(Water transportation in the Abukuma River), Rekisyun-fukushimabunko Vol. 61, Rekishishunjusha, 2005
竹川重雄：歴春ふくしま文庫 61 阿武隈川の舟運, 歴史春秋社, 2005
- 11) Tomiyama, H. : Fukushimaken-abukumasanyakuchitai-no-gogura-nitsuite(About Gogura in the Abukuma Mountains of the Fukushima Pref.) -study on the storehouse Part 7-, Architectural Institute of Japan Research Report, No. 58, pp. D29-D32, 1961. 6 (in Japanese)
- 12) Sagami, C. : Study on Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Yanagawa Domain in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 85, No. 771, pp. 1079-1088, 2020. 5 (in Japanese)
- 13) Sagami, C. : Study on Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Hirosaki Domain in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 83, No. 746, pp. 755-762, 2018. 4 (in Japanese)
- 14) Sagami, C. : Spatial Structure Characteristics of Okura-dokoro Owned by the Morioka Domain Located on the Kitakami River in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 75, No. 657, pp. 2693-2699, 2010. 11 (in Japanese)
- 15) Sagami, C. : A Study on the Spatial Structures of Edo Period’ s River Side Water Transportation Facilities Owned by Aizu Domain -In Case of Shiokawa Okura-tokoro-, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 75, No. 653, pp. 1721-1727, 2010. 7 (in Japanese)
- 16) Sagami, C. : Spatial Structure of Mikura-yashiki Owned by the Yonezawa Domain Located on the Mogami River in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 74, No. 641, pp. 1655-1660, 2009. 7 (in Japanese)
- 17) Sagami, C. and Iibuchi, K. and Nagai, Y. : Okuraba in Settlements Formed in the Kitakami River Basin in Sendai Fief -Case Study on the Wegedorf-, Minzoku-kenchiku (Folk Architecture), No. 130, pp. 15-24, 2006. 11 (in Japanese)
- 18) Sagami, C. : Spatial Structure of Gogura-syo Located in the Echigo Prpvince in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 77, No. 675, pp. 1179-1186, 2012. 5 (in Japanese)
- 19) Edited by educational board of Iino Town: Iinotyoshi-shiryo (History of Iino Town, source book), Vol. 2, Educational board of Iino Town, 1965
飯野町教育委員会編：飯野町史資料第 2 集, 飯野町教育委員会, 1965
- 20) Edited by educational board of Fukushima City: Fukushimaishi-bunkazaityosa-hokokusyo(Report on research of cultural property in Fukushima City), Vol. 39, Educational board of Fukushima City, 1998
福島市教育委員会編：福島市文化財調査報告書第 39 集, 福島市教育委員会, 1998
- 21) Edited by editorial board of “History of Kori Town” : Kori tyoshi (History of Kori Town), Vol. 6, Publishing board of “History of Kori Town” , 1992
桑折町史編纂委員会編：桑折町史第 6 巻, 桑折町史出版委員会, 1992
- 22) Edited by editorial board of “History of Ryozen Town” : Ryozen tyoshi (History of Ryozen Town), Vol. 2, Ryozen Town, 1979
霊山町史編纂委員会編：霊山町史第 2 巻, 霊山町, 1979
- 23) Edited by Kunimi Town: Kunimityoshi (History of Kunimi Town), Vol. 2, Kunimi Town, 1973
国見町編：国見町史第 2 巻, 国見町, 1973
- 24) Edited by editorial board of “History of Yanagawa Town” : Yanagawatyoshi (History of Yanagawa Town), Vol. 7, Yanagawa Town, 1988
梁川町史編纂委員会編：梁川町史第 7 巻, 梁川町, 1988
- 25) Edited by editorial board of “History of Yanagawa Town” : Yanagawatyoshi (History of Yanagawa Town), Vol. 10, Yanagawa Town, 1994
梁川町史編纂委員会編：梁川町史第 10 巻, 梁川町, 1994
- 26) Edited by editorial board of “History of Yanagawa Town” : Yanagawatyoshi (History of Yanagawa Town), Vol. 6, Yanagawa Town, 1986
梁川町史編纂委員会編：梁川町史第 6 巻, 梁川町, 1986
- 27) Edited by Kunimi Town: Kunimityoshi-shiryososo(History of Kunimi Town, source book), Vol. 3, Kunimi Town, 1976
国見町編：国見町史資料叢書第 3 集, 国見町, 1976
- 28) Edited by Kunimi Town: Kunimityoshi (History of Kunimi Town), Vol. 4, Kunimi Town, 1975
国見町編：国見町史第 4 巻, 国見町, 1975
- 29) Edited by Fukushima Pref. : Fukushimakenshi(History of Fukushima Pref.), Vol. 9, Fukushima Pref. , 1965
福島県編：福島県史第 9 巻, 福島県, 1965
- 30) Edited by Nakagawa, E: Dategun-sonshi(History of villages in Date County), Vol. 2, Rekishitosyosha, 1980
中川英右編：伊達郡村誌第 2 巻, 歴史図書社, 1980
- 31) Edited by editorial board of “History of Kori Town” :

Korityoshi (History of Kori Town), Vol. 1, Publishing board of “History of Kori Town”, 2002
桑折町史編纂委員会編：桑折町史第1巻，桑折町史出版委員会，2002
32) Edited by editorial board of “History of Yanagawa Town”：Yanagawatyoshi (History of Yanagawa Town), Vol. 2, Yanagawa Town, 1999
梁川町史編纂委員会編：梁川町史第2巻，梁川町，1999
33) Edited by Kunimi Town: Kunimityoshi (History of Kunimi Town), Vol. 1, Kunimi Town, 1977
国見町編：国見町史第1巻，国見町，1977
34) Edited by editorial board of “History of Kori Town”：Medemiru-Korityonorekishi (History of Kori Town, Collection of photographs and pictures), Publishing board of “History of Kori Town”，1985
桑折町史編纂委員会編：目で見る桑折町の歴史，桑折町史出版委員会，1985

注

- 注1) 文献1), p. 337
注2) 文献2), p. 749
注3) 文献3), p. 320
注4) 「信達両郡御廻米御用秘書写」(文献4), pp. 1131-1138 所収)，文政元年(1818) 宝暦8年(1758)の「渡辺十右衛門證文」から、城米を移出する14ヶ所の河岸が知られる。
注5) 文献5), pp. 1-84 本書に、藩政期の郷蔵が、室町時代を起源とすることや、租税制度に伴う郷蔵、備荒制度に伴う郷蔵、租税制度と備荒制度の両方に用いられた郷蔵の3種類に分けられることが述べられている。
注6) 「万手鑑」(文献7), pp. 305-310 所収)，天明8年(1788) 本書に、「一御米納ハ、前々ハ五ヶ村 六ヶ村と最寄ニ蔵を建置相納置、津出仕候処、近年ハ初納より村別ニ、阿武隈川通福岡渡利河岸 天神河岸、下郷ハ中瀬河岸 伏黒河岸江納申候、(後略)」とある。
注7) 文献10), pp. 77-92
注8) 文献10), pp. 86-87
注9) 文献19), pp. 12-13 所収 文献19), p. 68 に、本書は元禄・宝永期(1688-1710)を中心に記録したものと記されている
また、「小手郷村々書上帳」前文のうち天神留屋の項(文献19), p. 9 所収)に、「一、式間半ニ六間内大窪村 一、式間半ニ六間半青木村、一、式間半ニ六間立子山 一、式間半ニ六間飯野 辰二月十六日」とある。後述する立子山村の項と比べると、大窪村と青木村の桁行長さが異なっており、改築があったことが知られる。
注10) 文献8), pp. 69-73 所収
注11) 文献8), pp. 54-61 所収
注12) 文献19), pp. 46-48 所収 また、留屋の内訳について、「訳 一、三間上手戸 一、四間 小神 一、三間 鶴田 一、三間 在郷小綱木 一、四間 上小国 一、式間 大綱木 一、三間 秋山 一、六間 飯坂村 一、三間 東五十沢 一、四間 大波 一、三間 松沢 一、三間 町小綱木 一、四間 羽田 一、三間 西五十沢 一、拾四間納米入」とある。
注13) 渡利河岸には、渡利村・大笹生村の寄蔵や小手郷村々の留屋があり、複数の建物があつた。後述する瀬上村にも、所轄や領主毎に分けられた3棟の留屋があり、寄蔵の観を呈していた。施設が立地する村のみがこれを「寄蔵」と呼んでおり、本来の蔵組の寄蔵や河岸組の留屋とは意味が異なつたと考えられる。
注14) 渡利歴史研究会蔵，文献20)，pp. 36-37 掲載。天保7年(1836)の「渡利村絵図」は複数あり、上図は、画家玉泉の作。各河岸の蔵の描写はFig. 2と同じ。
注15) 個人蔵，文献20)，p. 22 掲載，文化2年(1805) 写し
注16) 福島県立図書館蔵
注17) 所在不明。文献10)，p. 82 掲載。なお、文献10)に所蔵先は記されておらず、著者は10数年前に逝去。
注18) 文献8)，pp. 126-136 所収
注19) 文献8)，pp. 110-119 所収
注20) 福島市及び伊達市の国登録有形文化財に登録されている土蔵物件は全て覆屋がない。
注21) 「乍恐以書付申上候御事」(文献4)，pp. 1139-1140 所収)，宝暦7年(1757) 本内村、鎌田村、北矢野目村、南矢野目村、丸子村の5ヶ村が仮河岸の設置を願い出ている。
「相定申一札之事」(文献4)，p. 1141 所収)，安永4年(1775) 本内(鎌

- 田) 河岸の河岸組に、上記5ヶ村に加えて、入江野村、井野目村、左場野村、飯野村、平田村、沖中野村、高梨村、宮代村の8ヶ村が加わっている。
注22) 文献6)，pp. 256-267 所収
注23) 「富沢村明細差出帳控」(文献6)，pp. 287-296 所収)，天保14年(1843) 本書に、「(前略) 下小国村当村伏黒川岸江御鉦米津出仕候道筋江御座候」とある。富沢村は、文化11年(1814)から幕末まで苅谷藩領であつた。
注24) 建築年は明らかでないが、仮に呼称のみが継承されたものとしても、規模は1ヶ村分の大きさであり、この建築遺構から藩政期の寄蔵の建物を見て大過ないと考えられる。なお、寄蔵の呼称は藩政中期まで用いられたことを前述した。
注25) 「御蔵守伝記大略」(文献21)，pp. 678-680 所収)，藩政後期 米沢藩領時代の寛文2年(1662)、御蔵所に御蔵守の先祖が居住した。
注26) 前掲注25)
注27) 「石母田村差出帳」(文献23)，pp. 285-291 所収)，元禄13年(1700)，本書に、「一郷蔵之儀、当村ニハ無御座候、桑折村之寄蔵へ入置、(後略)」とある。
注28) 後掲注31) 参照。
注29) 文献21)，pp. 733-741 所収
注30) 「南半田村明細帳」(文献21)，pp. 749-757 所収)，宝暦5年(1755) 本書に、「一、郷蔵之義者、当村ニ無御座候、桑折村寄蔵場ニ御座候、(後略)」とある。
注31) 寛政6年(1794)の「桑折町絵図」(大聖寺蔵、文献34)，pp. 58-59 掲載)には、2棟の蔵と蔵とは異なる1棟の居宅が描かれている。北門から南へ向かつて庭であり、突き当りに居宅がある。2棟の蔵はこの庭を挟んで妻側を向けて向かい合っている。本図は、主な土地利用や町の景観を描くことに重点が置かれており、北門から伺える敷地内の様子を大まかに描いている。蔵の棟数は正確でないが、蔵の配置に関して Fig. 5 と同じ空間構成が見て取れる。
注32) 前掲注25)
注33) 前掲注25) 本書に、「(前略) 近頃寛政之末、享和之始御銀山御置米村々江御預ケニ相成候ニ付、御廻米之分計り蔵組十ヶ村ニ而扶持方等相減候」とある。なお、本書に蔵組の村々として、桑折村、万正寺村、谷地村、南半田村、北半田村、泉田村、小坂村、鳥取村、内谷村、山崎村の10ヶ村が記されている。
注34) 文献19)，pp. 39-40 所収
注35) 文献6)，pp. 267-272 所収
注36) 文献22)，pp. 411-423 所収
注37) 文献23)，pp. 292-298 所収
注38) 東大枝村は、元禄13年(1700)に桑折藩領、延享4年(1747)に上野篠塚藩領になったが、寛延元年(1748)以降は幕府領であつた。但し、安永4年(1775)から寛政元年(1789)までの間は仙台藩預地になっている。
注39) 文献24)，pp. 636-637 所収
注40) 文献24)，pp. 26-33 所収
注41) 伊達市教育委員会蔵
注42) 文献25)，p. 1066
注43) 「明治二十年 地籍 二冊ノ内一 伊達郡東大枝村」，福島県歴史資料館蔵 本書の82番(蔵敷)に、「廿二年二月廿三日 幸圓用ニ付全筆払下」と加筆されている。
注44) 「信達両郡古来諸事留書」(文献26)，pp. 3-17 所収)，宝暦5年(1755) 宝暦3年(1753)、幕府は「囲籾制度」をとつた。本書に、幕府領川俣付・大森付(信夫郡)の村々の置籾蔵について、幕府代官所が新築を命じ、その入用は公儀より出ることが記されている。
注45) 文献9)，p. 9 安田は、江戸の浅草御蔵において納入手続が完了するまで、本途米及び、欠米の各村分を区別しておく必要があつたと述べている。
注46) 「明細差出帳東大窪村之内新料ひかえ」(文献27)，pp. 88-91 所収)，天保8年(1837) 本書に、「一当村之義者上知、古料、新料と三ヶ料ニ分郷ニ罷成申候、」とある。
注47) 「村誌 伊達郡高城村」(文献28)，pp. 673-678 所収)，明治14年(1881)
注48) 文献29)，pp. 742-751 所収
注49) 前掲注48)
注50) 広島市立中央図書館蔵
注51) 前掲注12)
注52) 3. 2. 6 節 梁川村などの蔵組の例であるが、他の幕府領においても同じ事情であつたことが推測される。
注53) 文献12)，p. 1080
注54) 前掲注9)に、「一、郷蔵 長廿式間 横三間半 四ヶ村寄蔵 六間飯

野・五間大窪・五間青木・六間立子山村」とあり、1棟と見られる。前掲注34)に、「一、寄蔵 長十老間横三間はり 九間二三間はり 右ハ小嶋、手戸、上糠田、布川、御代田(ママ)六ヶ村」とあり、2棟を6ヶ村が共有している。

注55)前掲注9)の留屋と比較すると、飯野村と立子山村の桁行は同じであるが、大窪村と青木村の桁行は1間ほど短い。なお、梁行は1間長い。

注56)文献23), pp. 331-336 所収

注57)旧貝田村の字地「町裏」は、標高170m辺り、旧光明寺村の字地「志久」は、標高85m辺りに見られる。一方、明治14年(1881)の「村誌 伊達郡大木戸村(旧西大窪村)」(文献28), pp. 669-673 所収)によると、人家5戸以上の字地は、「赤穂」、「前」、「館」、「西原」、「熊久根」であり、現在これらの字地の多くは、標高60m辺りに見られる。旧東大窪村に関する前掲注47)によると、人家5戸以上の字地は、「前」、「南畠」であり、現在これらの字地は、標高70m辺りに見られる。

貝田村の町場は、奥州道中の宿駅であった。その他の字地は、新田ではなく、古来の農村と推察される。従って、本書から幕末期の字地を見ても大過ないと考えられる。

注58)徳川林政史研究所蔵

注59)「村誌 伊達郡五十澤村」(文献30), pp. 241-261 所収) 明治14年(1881) 本書の道路の条に、「梁川街道 西部五輪堂ノ東端ニ於テ角田街道ヨリ岐シテ南シ折レテ越五十澤ノ南端ニ傍フテ西シ又折レテ南シ船場ノ渡頭ニ至ル(後略)」と記されている。

注60)明和9年(1772)の「西大枝村明細差出帳」(文献23), pp. 310-314 所収)に「東大枝郷蔵所江式拾四丁余」、前掲注46)天保8年(1837)の「明細差出帳東大窪村之内新料ひかえ」に「東大枝郷蔵迄廿六丁程」、前掲注56)文久元年(1861)の「西大窪村指出明細帳」に「東大枝村河岸御蔵迄老里余」と記されている。

注61)各村から東大枝村郷蔵所までの距離の差は、東大窪村(新料)と西大窪村との間よりも、西大枝村と東大窪村(新料)との間の方が少なく、後者の2ヶ村の蔵は隣り合っている(Fig. 7)。しかし、東大窪村の蔵は2棟あり、敷地の東端の方が新料の蔵であれば、西大枝村の蔵と隣り合うことはない。他の村の明細帳は現存しない。

注62)前掲注12) 本書は留屋の端から順に各室を記したものと考えられよう。なお、本書の村々の室の並びに関して他に有効な根拠は見出せない。「在郷小綱木」・「大綱木」・「町小綱木」や、「東五十沢」・「西五十沢」はそれぞれ離して配置されている。

注63)「山舟生村明細帳」(文献24), pp. 3-11 所収) 享保16年(1731) 本書に、梁川村の寄蔵と留小屋の普請における入用について記されている。どちらにも「竹木ハ御立林ニ而被下」とあるが、寄蔵に関してのみ「御役萱を以葺替仕候」とあり、敷地囲いの入用が記されているので、この留小屋は茅葺屋根でなく、敷地囲いがなかったと思われる。

注64)文献18), pp. 1180-1181 近世期における越後国の郷蔵所の実態が知られる事例のうち、寄蔵の形式は三島郡飯塚村の郷蔵所のみであった。この蔵組は3ヶ村で、それぞれ独立した蔵をもつ。蔵の大きさはまちまちである。越後国の郷蔵所の場合、計蔵と呼ばれる検査所が併設されるが、上記の郷蔵所では村々が1棟の計蔵を共有した。

注65)文献30), pp. 12-261 所収

図版出典

Fig. 1 筆者作製

Fig. 2 「奥州信夫郡福嶋領渡利村絵図」, 天保7年(1836), 福島県歴史資料館蔵 本図は、村の土地利用を描くことを目的としているが、主な建物を立体的に描いている点に特徴がある。

原図の写真に、記号、() の文字を記入した。

Fig. 3 筆者作製 本文で検討した河岸組や蔵組の範囲を網掛けし、これと津出しを行った河岸とを矢印で結んだ。

Fig. 4 筆者撮影(2010年5月29日)

Fig. 5 「奥州桑折之図」, 作製年不明, 中根忠之氏蔵 本図には、本丸などの曲輪が描かれており、作製年代は桑折藩統治時代(元禄13年(1700)-延享4年(1747))の可能性はある。但し、桑折藩は、城を設けておらず、陣屋があった。城下町の町並み及びその付近の屋敷地等の土地が描かれている。土地は、分割され、それぞれに長さが記されている。また、寄蔵などに「不納」と記されていることから、検地に関係する絵図史料と見られる。建物は、寄蔵の他に寺地にも描かれている。本図の目的は、イメージではなく、土地等の実情を把握することにあつたと考えられる。河岸は記されていないが、寄蔵と阿武隈川を結ぶ道筋が見られる。

文献31)付録の複写物(桑折町教育委員会の許可を得て使用)に、解説文字、方位、() の文字を記入した。

Fig. 6 「奥州伊達郡東大枝村絵図」, 天保8年(1837), 伊達市教育委員会蔵 本図は、土地利用の他に集落などの建物や樹木を丁寧に描くなど、景観にも視点が置かれている点に特徴がある。郷蔵所には5棟の建物が描かれている。しかし、天明9年(1789)の蔵組は既に7ヶ村であり、省略されている可能性が高い。しかしながら、郷蔵所と蔵組の村々や河岸とのつながりが知られる貴重な史料である。

史料未整理のため、文献32)掲載のために撮影された写真をトレースし(一部省略)、記号、凡例、方位、() の文字を記入した。

Fig. 7 「東大枝区有文書 地積改正野取図面」, 明治9年(1876), 所蔵先不明 本図は、地積改正のために作製されたものであり、旧郷蔵所の敷地面積も記されている。従って、寸法に注意して描かれたものと考えられる。旧郷蔵所の敷地は、明治22年(1889)の払い下げ時は82番地であり(前掲注43))、現在の公図の82番地(7つに分筆)と地区における位置及び凡その敷地形状が一致する。

文献33)掲載図をトレースし、記号を記入した。

Fig. 8 筆者作製 本稿で参照した史料から知られる留屋及び同じ用途の川岸御蔵を、1間を1mmとして描いた。

Fig. 9 上図 筆者作製 貝田村、光明寺村、西大枝村、東大枝村、五十沢村の名は、現在も大字として用いられている。また、明治9年(1876)に西大窪村は大木戸村、東大窪村(各分郷合併後)は高城村に改称され、これらの名も、現在の大字に用いられているので、現在の大字境をもとに作製した。なお、明治14年(1881)の「村誌」^(注65))に各村の東西方向と南北方向の幅員(「直径」とある)が記されているが、貝田村と西大窪村の南北方向の幅員は、本図の4分の3ほどである。しかし、郷蔵所から見た各村の方位や村々の位置関係の検討に用いても大過ないと考える。

下図 伊達市都市計画図(No. 10・11、平成20年(2008) 測量、縮尺2500分の1)に郷蔵所跡、旧街道、御出道等を加筆、文字を記入した。郷蔵所跡については、明治9年(1876)の「地積改正野取図面」(Fig. 7)に「館八十番」と記されている。一方、明治22年(1889)の土地台帳規則の制定のために作製された地籍図及び、関係資料の「蔵敷」の地番は「八十二」であり、明治前期に地番が整理、変更されたことが推測される。上記の地籍図、旧公図、現状の地番から推定した。但し、敷地の各辺の長さは明らかでないので、Fig. 7や土地台帳規則関係資料に記されている「一反五畝一步」の面積を正方形として描いた。藩政期の梁川街道については、前掲注59)「村誌 伊達郡五十澤村」の記述などをもとに推定した。御出道については、Fig. 6において東大枝村と五十沢村の境を通っており、これらの村名が現在の大字名になっているので、現在の大字境に描いた。

本研究は、科研費(18K04551)の助成を受けたものである。

SPATIAL STRUCTURES OF FACILITIES CONCERNING GOGURA THAT LOCATED ALONG THE ABUKUMA RIVER IN THE SHINTATSU REGION IN THE EDO PERIOD

Chikao SAGAMI^{*1}

^{*1} Prof., Dept. of General Engineering, National Institute of Technology, Sendai College, Dr.Eng.

Chapter 1: This study draws attention to facilities concerning the gogura that were located along the Abukuma River in the Shintatsu region for the shipping of jomai to Edo. It aims to clarify the fact of their spatial structures based on valuable illustrations, mura-meisai-tyo (details of a village), and other historical sources. In the Mid-Edo period, there existed facilities called yose-gura and tome-ya along the Abukuma River in that region. The yose-gura were formed by gathering village gogura in one place. The rice stored in the yose-gura was taken to the riverside and loaded onto boats as jomai. The tome-ya were facilities for storing jomai by the riverside and were jointly set up by villages that were unable to set up a yose-gura near the riverside. Both facilities were common sights in the Mid-Edo period. In the Late Edo period, each village would set up their own facilities by the riverside.

Chapter 2: This chapter discusses previous research and the process of this study. It is concerned with the facilities of 10 towns and villages along the Abukuma River, where the existence of buildings is attested in historical sources.

Chapter 3: This showed each facility's structure and building overviews for each town or village. The discussion on riverside facilities included the actual circumstances of the tome-ya on the right bank of the Abukuma River (Tenjin bank and Watari bank of Watari Village, Shinobu County as well as Nakaze Village, Date County) in the Mid-Edo period and of the "kawagishi-okura" on the Tenjin bank in the Late Edo period. Meanwhile, the discussion on gogura included the actual circumstances of the yose-gura in the Mid-Edo period (Watari bank and Kori Village, Date County on the left bank of the Abukuma River) and of the Higashi-oeda Village's gogura-syo during the last days of the Tokugawa Shogunate.

Chapter 4: The commonalities and spatial structural techniques of the various riverside facilities and the gogura were considered. The former tome-ya were likely a building which villages share according to the amount of rice regardless of area. That is, they were row houses. Some of these were simply wooden structures called amaya. The latter yose-gura of the Mid-Edo period had two case concerning the building method depending on size. First is to gather each village's gogura, it is called "bunto". Second is row house. The gogura-syo on the left bank of the Abukuma River in Date County were bunto that inherited the tradition of the yose-gura of the Mid-Edo period. The arrangement of buildings at the Higashi-oeda Village's gogura-syo during the last days of the Tokugawa Shogunate likely reflected the geographical conditions of each village to avoid congestion when delivering the rice.

Chapter 5: The conclusion. Yose-gura and tome-ya in the Shintatsu region during the Mid-Edo period were at the heart of a system where villages worked together to transport jomai, a practice that continued in the gogura-syo during the last days of the Tokugawa Shogunate.

(2021 年 4 月 5 日原稿受理, 2021 年 6 月 8 日採用決定)